

明治大正期の国定忠次もの：
菊池寛「入れ札」を論ずるために

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学国語国文学研究室 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奥野, 久美子 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20171225-032

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	明治大正期の国定忠次もの：菊池寛「入れ札」を論ずるために
Author	奥野, 久美子
Citation	文学史研究. 53 巻, p.1-22.
Issue Date	2013-03
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

明治大正期の国定忠次もの

—— 菊池寛「入れ札」を論ずるために ——

奥 野 久美子

一、はじめに

大正期の文学における講談速記本（以下講談本）からの影響について、稿者はこれまで芥川龍之介や荒畑寒村の作品を取り上げて論じてきた（拙著『芥川作品の方法―紫檀の机から―』平二一・七 和泉書院 第六・七・九章）。菊池寛の作品についても、「岩見重太郎 (An Allegory)」〔中央公論〕大一一・四）が講談本『岩見武勇伝 笹野名槍伝』（長篇講談第三編）（博文館 大五・一）に拠っていることを論証した（拙稿「菊池寛の戯曲『岩見重太郎』―博文館長篇講談とのかわりについて―」／京都教育大学「国文学会誌」平二三・七）。本稿では、菊池寛の作品の中から、講談や舞台で人気のあった国定忠次（忠治）を扱った「入れ札」〔中央公論〕大一一・二）について論じたい。国定忠次がもともと講談のヒーローであったにもかかわらず、「入れ札」を論ずるに際して講談、講談本を視野に入れた研究はこれまでなされていないからである。ただ、この作品の前提となる、明治大正期の国定忠次ものについては、実録等も数多くあり、講談本だけでは論じきれない広がりがある。従って、以下では明治大正期の国定忠次ものの文芸全般を調査した中での「入れ札」の特異性を探り、菊池の創作方法を解明したい。また「入

れ札」以外の大正期忠次ものの文芸（舞台脚本を含む）に見られる講談本の影響についても考察する。

二、「入れ札」について

「入れ札」には忠次とその乾兄^{こぶん}たちが登場するが、主人公は乾兄の九郎助である。以下簡単に筋を記し、乾兄名には傍線、主なエピソードには波線を付す。

上州岩鼻の代官を斬り殺し赤城山を引き払った忠次は、乾兄十四五人を連れて大戸の関所を破る。威勢を怖れた役人たちは咎めもなかった。信州を目指す^すが、十数人を連れては目立ちすぎる。忠次は、連れて行く乾兄二、三名を選びたいが、命を捨てて自分に尽くす乾兄達に優秀はつけられず、いっそ皆と別れたいと言う。乾兄たちからついてゆくものを入れ札で選ぼうという案が出る。稲荷の九郎助は、いちばんの兄貴分ではあるが、最近はその声望をずっと若い大間々の浅太郎〔戯曲版は板割の浅太郎〕や松井田の喜蔵に奪われつつある。自分に入れてくれそうな弥助の札だけでは足りないの、自分で自分に一札入れる。開けてみれば九郎助にはその一札だけであり、落選する。一

人秩父へ落ちようとする九郎助を、弥助が追ってきて、お前に入れたのにと嘘を吐く。弥助の嘘を咎めることは自分の恥をさらすことにもなり、九郎助は自分の卑しさに絶望する。

波線部、代官殺しから赤城山を引き払い、大戸の関を破り信州へ、という筋は、次節で検討する同時代の忠次ものの文芸での一典型であり、入れ札のくだりは菊池の創作である。

この小説には、後に六代目尾上菊五郎の依嘱で菊池が脚本化したもの（同題）もあり、その戯曲版「入れ札」（『中央公論』大正一四・一一）は大正一五年一月に市村座で上演。菊五郎は弥助を演じた。戯曲版の結末は小説版とは異なり、九郎助が弥助の嘘を咎めた挙句、弥助に自分のような「意気地なしの卑怯者」を「成敗してくれ！」と言ってすり泣く。以下本稿で特に断らずに「入れ札」と表記するときは、小説版を指すものとする。

また、本稿での菊池の著作からの引用は『菊池寛全集』（平成五・一五 高松市菊池寛記念館）によるが、同全集第三巻所収の「入れ札」には諸本により細部に異同がある。うち一箇所、同全集の本文に問題があると思われる点がある。「鯉節や生米を噛つて露命を繋ぎ、岩窟の樹の下で、雨露を凌いで居た幾日と云ふ長い間、彼等は一言も不平を滾さなかつた。」という箇所だ。傍線部（引用者による。以下同）は、初出や『道理』（大正一〇・七 春陽堂）、『菊池寛傑作集』（大正一〇・七 新潮社）、『恩讐の彼方に 他三篇』（大正一〇・八 春陽堂）、『菊池寛全集』第四巻（大正一・五 春陽堂）、『中傷者』（大正一・五 金星堂）、『名君』（大正一・一〇 而立社）、『菊池寛全集』第二巻（昭和四・四 平凡社）、『菊池寛全集』第三巻（昭和七・一〇 改造社）、『恩讐の彼方に』（昭和一〇・

一一 荻原星文館）ではいずれも「岩窟や樹の下」である。現行全集が底本とする中央公論社版『菊池寛全集』第二巻（昭和二・一二）で初めて「岩窟の樹の下」となる。文意からしても岩窟の中に樹があるというのはおかしい。ここは「岩窟や樹の下」とすべきである。

さて、菊池寛はこの作品について「短篇小説中、歴史小説では「入れ札」は、会心の作である。」（「自序」改造社版『菊池寛全集 第一巻』昭和六・七）と述べている。上記のように多くの単行本に収録していることからしても、かなりの自信作だったのであろう。同時代評では、「一寸揆たれる質のものではあるが氏の作物として余りすぐれたものとは思はれない。作意のあまりに陽はで浅いやうなのが気になるのである」（無記名『二月の雑誌』／『讀賣新聞』大正一〇・二・一七）という否定的なものもあるが、「上手な作だ。（中略）菊池式テエマ小説に入る部の作だらうが、この「入れ札」などにはふつくりした丸味が加はつて来てゐる。九郎助と弥助の人間らしい弱さを対照させて書いてゐるところなど殊に、「忠直卿行状記」時代と各段に進歩した手腕が感じられる。」（中戸川吉一『二月の文壇評（六）』／『時事新報』大正一〇・二・一二）、「所謂、菊池氏一流の「テエマ小説」と云ふべきものだが、読んで見るとなか／＼面白い。簡樸な筆致ではあるが、光景もまぎ／＼と眼前に浮んで来るし、それぞれの性格や心理をも、大きな手でぎゅつと掴んでゐる。そこに細さはないが確かさはある。私は史実の有無は知らないが、かう云ふ作品を書かせると、菊池氏は流石にうまいと思ふ。氏も又た文壇一方に於ける才人と云つても決して過賞ではない。」（水守亀之助『読んだものから（二）』／『讀賣新聞』大正一〇・二・一四）など、概ね好評であった。ちなみに戯曲版「入れ札」上演時の劇評でも、

「雑誌で読んだ時には、〔中略〕所謂芝居としては相当に面白い効果が挙がるだらうとは予期した。しかし芸術としての価値について考へると、いつかずと前に読んだ小説の方が遙に勝れてゐるやうに思つた。〔中略、今回の上演は〕高級芸術家としての菊池氏の名を一層重からしめるものではないが、尠くも大衆芸作家としての領域を蓋し一步押しひろめたものだとは云ひ得るだらう。殊に眼について感じられるのは、氏の劇作術がますます円熟して来て、珠に近くなりつゝあることである。〔中略〕正月芝居中での白眉的一幕だらうと思ふ。」（北尾亀男『面白かつた『入れ札』／『演芸画報』大・一五・二〕と、上演を高く評価しつつ、小説の方がさらに優れていたと述べている（一）内引用者。以下同）。

後には吉川英治も新潮文庫『忠直卿行状記』（昭三三・三）の解説で「内容、技巧とも、菊池氏としては、会心の作品であらう」と評価し、中村光夫も『菊池寛文学全集第四卷』（文藝春秋新社 昭三五・九）の解説で「彼の短篇のうちで傑出したもののひとつ」「中核をなす近代人的な心理と、時代劇風の背景が充分に調和して、渾然たる物語をつくり上げています。」と賞賛している。

この作品の執筆背景については、菊池寛自身が後に以下のように語っている。

この小説にはヒントがある。／嘗つて徳田秋聲、田山花袋両氏の生誕五十年を記念して、「現代小説選集」を出す事になつた時のことだ。一々文壇人が会合して、選集に執筆する作家を投票したことがある。／その席には過去に相当文名を謳はれた作家で、今は書かなくなつてゐる人もゐた。若しさういふ不遇の立場にある

人が落選したら、その人は何と感ずるだらう。それは明らかに、現文壇によつて作家たる地位を拒否された事になるのだ。自分は席上、フトそんな事を考へながら、暗然たる氣持になつた。／これを処と、場所と、時代を變へ、人物を国定忠次といふ俠客に取つて書いたのが「入れ札」の一篇である。

（文壇大家一夕話）／「講談俱樂部」昭二〇・八）

着想は自身の体験にあり、国定忠次といういわば衣装を借りて仕上げた作だという。体験を作品に昇華させるためにその衣装をどのように使いこなしたのか、本稿で検証したい。

この作品に関する先行研究は多くはないが数編の論考がある。築川啓子「菊池寛 二つの「入れ札」——小説の戯曲化をめぐる——」（『青山語文』平八・三）は、戯曲を失敗作とし、祝賀会の件を書くのに忠次を選んだのは、当時大人気であつた澤田正二郎の新国劇の「国定忠次」に注目したからではないか、とする。柄谷行人「匿名性の問題——菊池寛『入れ札』をめぐる——」（『シュンボシオン』平九・三）および「入れ札と籤引き——菊池寛『入れ札』をめぐる——」（『文学界』平一四・一・二）は本作を材料に投票という制度について論じたもの。また片山宏行「文壇楽屋裏——「入れ札」」（『菊池寛のうしろ影』未知谷 平一二・一 所収）では、祝賀会の一件について久米正雄の証言などもまじえて検証している。

大正二年七月興行の山崎紫紅作「国定忠次」の劇評「歌舞伎座盆興行」（大二・八「歌舞伎」）は「下町二人娘」の会話形式で書かれたものだが、そこで「矢張り講談物は講談物だわねエ」と言われているように、大正期の人々の意識として、国定忠次といえはまず講談であつ

た。当然菊池寛も「入れ札」執筆にあたっては講談・講談本を参照した可能性が高い。しかしこれまでの「入れ札」論には、講談・講談本という背景を考慮に入れた論考はない。

以下ではまず講談本を中心に、実録実記等も含めて明治大正期の国定忠次ものの文芸の概要を示し、それらを踏まえた上で「入れ札」の特徴を考察したい。

三、明治・大正期の忠次もの ― 講談本、実録、実記、浪花節、小説、脚本等 ―

明治大正期の忠次ものの文芸を調査し、稿末別表のように年代順に整理した。単行本を中心とし、管見に入った限りのものを調査したが、一部雑誌掲載講談も含んでいる。新聞、雑誌掲載講談は膨大な点数に及ぶが、単行本からの抜粋であったり(52)、後に単行本化されたもの(54)も多くあるため、網羅的な調査は行わず参考程度にとどめた。52は44からの抜粋、54は大正末から昭和初にかけての長期連載の一部を『正伝 国定忠次』(昭一一・ハサイレン社)として単行本化している。また⑦⑧⑨など明治二〇年前後に多数出版された「実記」「実伝」「近古実録」等はほぼ同内容であったため、表に掲げた以外にも数点の文献があったが省略した。

舞台上演の脚本も含んでいるが、別表のうち⑤の歌舞伎「上州織狭客大稿」は、後に『版權興業権所有／演劇脚本 上巻』(竹紫金作者、吉村いと発行 明二・一二)に序幕のみ収録されているが、全編を収めた脚本が入手できなかったため、上演時の詳細な筋書をもって補い、発行年月も筋書のほうで配置した。また、舞台上演された忠次ものの

劇評や、忠次関連随筆を数点、参考までに61以降にまとめたが、そのうち山崎紫紅作「国定忠次」は脚本が入手できなかったため、これも最も詳細な梗概をもって本文に替え、35に編入した。先掲の梁川啓子氏論文で触れられている澤田正二郎の新国劇「国定忠治」の脚本は47で、本稿別表では現代の脚本集に拠ったが、大正期の劇評を見ると筋はほぼ同じである。大正期以降、忠次ものの映画も多数制作され、澤田正二郎の「国定忠治」も大正一三年末、牧野省三監督で公開されているが、今回、映画脚本は調査対象外とした。

さらに、〈種別〉のうち「実記」と「実録」では内容にほとんど違いはなかったが、本表では書名に従って「実記」と「実録」を併用し、4、②など書名で区別できないものは「実記」とした。なお60は、唯一閲覧できた国立劇場図書館本には奥付がなく出版社、出版年不明である。ただ、三代目旭堂小南陵『大阪の演芸速記本基礎研究』(たる出版 平六・八)によれば、本書と同題同演者の講談本は博多成象堂刊であり、続編『続・明治期大阪の演芸速記本基礎研究』(たる出版 平二・五)に梗概もある。また、本書と同じ演者と速記者のコンビによる他の講談本は数多く、明治二十年代末から大正初期まで出版されている。

以上が別表に関する説明であるが、この別表にまとめた調査の結果、忠次ものにはごく大まかに分けて二つの系統があり、両系統間でエピソードと登場人物名(忠次の子分や敵対者)に違いがある。「入れ札」との比較のため、子分の名前で分類し、実記の系統に多い人物名を持つものを仮に〈実記系〉とし、もう一つの系統は主な子分として日光の円蔵が登場することが多いため〈円蔵系〉とする。円蔵が登場しな

いものでも、他の子分名とエピソードが〈円蔵系〉であれば〈円蔵系〉に分類する。

〈実記系〉の主な子分は闇雲の丑松、大仏小八、釈迦の十蔵、小猿の伝吉などで、「入れ札」の主人公九郎助もこちらに含まれる。〈円蔵系〉の主な子分は円蔵のほか三ツ木の文蔵、成塚の三代太郎などで、「入れ札」で九郎助がライバル視する浅太郎はこちらに含まれる。〈実記系〉の並川の孝子才助が〈円蔵系〉では別表14、17等の鹿沢村の才助にあたるなど、重なるエピソードはあるが、両系統の人物が混合することは、後述の数点の例外を除いてはない。例えば赤城山の首実検の挿話でも、〈実記系〉では小猿の伝吉が鳴神首右衛門の首を持参するが、〈円蔵系〉では板割の浅太郎が伯父の勘助の首を持参する、というように両系統には違いがある。別表の番号で振り分ければ

〈実記系〉(番号に○を付す) 1、3、5、7、9、13、15、18、20、46

〈円蔵系〉(番号を斜体かつ太字にする) 4、6、10、12、14、16、17、21、23、25、27、33、35、36、38、45、47、50、53、55、57、59、60となる。24、34、37、48のように子分名がないものや例外的な子分名ものを除くと、残る11、26、49、54、58は、菊池の「入れ札」(49)およびその戯曲版(58)を含め、両系統の子分名が混合している。

さてここで、忠次もの講談の生成と分類について諸説を整理したい。まず、実在の忠次(長岡忠次郎)は嘉永三(1850)年十二月二十一日、大戸の関所で礫に処せられた。同時代を生きた羽倉外記(簡堂、1790-1862)による「赤城録」等と称される実伝が、最も直接に近い伝記資料とされている(高橋敏『国定忠治』岩波新書 平二・八)。その忠次

の生涯が講談に仕立てられたことに關しては、次のような解説がある。

国定忠治の講談を拵えたのは、寶井琴凌である。田舎まわりの巡業中、忠治の話を聞いて講談にまとめ、江戸へ戻って披露した所、これが大好評、琴凌は一躍売れっ子になった。／その評判を聞いて、新物読みで売っていた松林伯円が、俺もとばかり創作を加えて拵えたのが、後に芝居になった『上州織侠客大綱』である。この方は、忠治の親は為朝の刺青をしている為朝忠五郎という男で、紀ノ国屋の娘お作と駈落ちして上州へ行き国定村に住みついた事になっているし、忠治の女関係も描いて色気のある講談になっている。また、三室の勘助の一条も伯円の創作だという事である。

琴凌作は、これと区別して、「馬方忠治」と呼ぶ。／それから初代伯山の弟子徳壽齋来山作の「来山忠治」、秦々齋桃葉作の「天王忠治」というのがあり、他にも随分あったものらしいが、後には、各自の傑れた場面を混合して、今日の、「国定忠治」になったもののである。(『名講談解題』／『定本講談名作全集 別巻』講談社 昭四六・二)

大正期にはこれとはやや異なる分類もあり、別表66の劇評では

「国定忠次」これは講談物である。忠次と云ふ説物は初代神田伯山(今の松鯉の師匠)の弟子で来山と云ふ者が上州で聞いて来た実話に造作を加へて説出したが元祖である。忠次が馬方をして居た所が初日の説物で、乃で講談師社会では之を「来山忠次」又「馬方忠次」と云ふ。(中略) 其他には「天王忠次」と云ふものがある。／それは桐生の傍に天王と云ふ土地があつて其所に居た藤三郎と云ふ親分より盃を貰つて売出したと読む者がある。之を

「天王忠次」と云ふ。此方は故人桃葉などが得意に読んだものだ。「中略」此「天王忠次」の他に「為頼ためもと（ママ）忠次」と云ふ変り種がある。それは先代「二代目」伯円が余り忠次には色気がないと女を配材でくちあひけして捏上でこしらへたものである。此は江戸子の忠次で、親父は為頼はりのりの割青をしてそれが異名になつて顔役になつて忠五郎と云ひ、三十間堀の材木商紀伊国屋の娘お作と通じて是を伴れて上州佐佐郡国定村に行き茲で親分になり、人呼で為朝忠五郎と云ふ。此人の倅が忠次であるとか大ヨタを飛ばしたが、一時は頗る講談界流行の読物となつた。先年「明治十七年」市村座で五代目が忠次を出したが、その時河竹「三代目新七」の書いた脚本は此を粉本にしたものである。「中略」又鳴神音右衛門と云ふ敵役も伯円の拵へた忠次の方にある名で其他赤城山の首実験も講談にある場を焼直したのである。

と解説されている。先の「名講談解題」が馬方忠次（琴凌）と來山忠次を分けているのに対し、こちらは琴陵の名を出さず來山忠次＝馬方忠次、天王忠次、為朝忠次の三分類である。ちなみに別表54では、講釈師の「來山」が登場人物の一人であり、忠次一家の食客となっている。

さらに別表16（41とほぼ同文）の講談本でも

上州佐佐郡国定村の忠次の伝を弁じます。是も三通りに別つて居りました、天王忠次といふのがあり、又神田三河町に遊人の忠五郎といふ者があり、上州へ赴き、女房おさくの腹に出来ましたる者で、彼の深澤八五郎と威を争ひましたる忠次もございます、馬琴てまへの弁じまするのは、馬方より出ます」（P2）

とあり、明治大正期には天王、為朝、馬方の三分類とされていたようだ。ちなみに天王忠次に分類される別表14の講談本は馬方と天王の二種をあげ、「馬方忠治には上州佐佐郡と出て居るは大きな誤り（新田郡が正しい）」（上巻P83）と、馬方忠次の間違いを正すくだりもあり、他の系統の講談を意識していた様子もうかがえる。

この三分類は講談の生成に基づくもので、本稿での子分名をもとにした二系統の分類とは異なるが、別表の「忠次の生立ち」欄に「馬方」とあるのが馬方忠次、「天王藤三郎の跡目を継ぐ」とあるのが天王忠次である。父が為朝忠五郎であるというものは管見の限り37しか確認できなかった（忠五郎とのみするものには12もある）。伯円の忠次講談が入手できなかったためである。28、37など混合型とみられるものもあり、すっきりと分類できるわけではないが、「円蔵系」の中に天王忠次、馬方忠次があると判断できる。さらに「円蔵系」には、若くして人を殺め出奔したという、別のパターンも複数ある。一方「実記系」の忠次の生立ちは、生立ちに言及があるものは全て、父は忠助で忠次は幼少より悪行が過ぎ叔父の彦助に預けられる、というものである。ただ、先掲の66に言う「鳴神音右衛門と云ふ敵役」は「実記系」の登場人物であり、伯円が音右衛門の名を取り入れていたということ、伯円の為朝忠次には「実記系」の実録の影響があったのかもしれない。

さて、別表へ戻り、このように分類すると、「入れ札」は「実記系」「円蔵系」の両系統を混合した珍しい例だということがわかる。菊池の作を除くと、混合型は11、26、54のみである。11は、「円蔵系」の人物と筋をベースにして、一部に「実記系」の人物と挿話を挿んだもの

のである。〈実記系〉から取り込んだのは、飢饉の際に九郎助らに相談の上、私財を投じて貧民に施しをする場面、そして吉田伝助が二百両を奪われたのを救う場面である。奪ったのは〈実記系〉では小猿伝吉とその仲間一人だが、11では久助ら二人となっていて名前が異なる。なお吉田伝助の挿話は、他にも31、33など〈円蔵系〉のものに一部混入する例が認められる。26では前半が〈実記系〉の子分らが登場する鬼熊退治のエピソード、後半は〈円蔵系〉の子分らが酔いつぶれて捕り方に捕まり、忠治が代官に斬りかかって助け、天神山へ立て籠もるという話である。これら11、26の例は、異なる系統の先行作品から場面を取り込んだ結果、一つの作品の中に二系統が併存したという形であり、場面や人物は完全に区切られている。つまり系統の違う人物、例えば〈実記系〉の九郎助と〈円蔵系〉の浅太郎が、一つの場面に同時に登場することは決していないのである。

また54は〈円蔵系〉の人物と挿話をベースにした長編創作であるが、一カ所だけ、〈実記系〉の九郎助の名が出てくる。大正一四年六月号（二五巻七号）のP197、洪の源七のもとへ兆平の仇討ちに行く場面で、忠次の子分の名前が列挙される。「日光の円蔵が副将格、才市、千代松、浅二、文蔵、新十郎、平次、九郎助、友蔵、さういつた面々、それに新来の秀吉も仲間に加はつてゐる」とあり、〈円蔵系〉の子分名が多い中に唐突に「九郎助」が出てくる。他に〈実記系〉の挿話はないので、ここだけいかにもとってつけたようであり、名前だけを借りてきたものであろう。

以上のように、両系統の人物や挿話が混合している例のうち、菊池の作以外は全て両系統の挿話や人物を切り貼りしただけのものである。

一つの作品の中で、両系統の人物を織り交ぜ、それなりのはたらきを持たせているのは、「入れ札」とその戯曲版のみである。

四、「入れ札」の特徴とその考察―忠次ものの文芸と比較して―

前節で検証したように、明治大正期の忠次ものの文芸と比較して、「入れ札」の最も顕著な特徴は、系統の違う子分名の混合である。具体的には、九郎助、釈迦の十蔵、闇雲の丑松、才助（〈円蔵系〉にも）、今井小藤太は〈実記系〉、大間々の浅太郎、松井田の喜蔵は〈円蔵系〉である。残る弥助などは、どの本にも出てこないもので、菊池の創作であろう。本節では前節を踏まえ、「入れ札」の重要人物の検証を通して、菊池の創作方法を知り、この両系統の混合の意味を見いだしたい。なお、先の子分名のうち今井小藤太については「入れ札」では名前のみが出てくるもので、忠次は信州の小藤太の家を目指している。別表②③④⑥などの〈実記系〉に出る信州追別（わかれ）の忠治の知人で、小猿伝吉を傷養生のため逗留させる。②④⑥では忠次が助ける女性、花の井の父で、①では忠次の国定の旧宅が鳴神の子分に襲われたとき撃退するのに加勢する。③では、才助の妹おことを忠次に娶せ仲人役まで務めるなど、小藤太が特に活躍する。このように〈実記系〉を通じて頼りになる重要人物として描かれており、「入れ札」で忠次が頼ってゆくのはふさわしい。

以下、九郎助、浅太郎、忠次という重要人物ごとに、他の忠次ものと比較しつつ「入れ札」の特徴を考えてみたい。まず、「入れ札」の主人公九郎助の人物造型である。別表⑦（⑧⑨②⑩もほぼ同文）では、九郎助は忠治の一の子分のような風格である。忠治の両親の法事のあ

と、忠治が子分たちに語りかける場面は

九郎助始め十二人は跡に残りて盃蓋を改め又三五順巡る頃忠治は九郎助に向ひ我人間の浮沈生滅を思ふに是皆天の所為にして人力の及ぶ処にあらず殊に天災にて近年五穀の実りあしく世間の困窮見るに忍びず〔中略〕縦令聊かの事なりとも施興をなさん心なり

(P 49 51)

と描かれ、忠治は十二人の子分を前に特に九郎助に向かって貧民への施しの相談をする。同様に⑤の講談本では、「九郎助は忠治に對ひ九郎「何んと皆な斯う揃つたから往ふじやねへか〔下略〕」(P 26)と、忠治に出入を促すほどの人物である。吉田伝助を襲った賊の一人、鵜の目早助を捕まえる場面では、「稲荷の九郎助が清光寺の塔婆を引抜き宛も軽々と打振つて早助が肩先を力に任せて発矢と撃つ大力に打挫かれ」(P 31)という活躍を見せる。

また、「忠治は種く多用もあれば〔岩窪の〕山寨の普請掛りを九郎助に命じて万事心付けました」(P 181)、「山寨の配下を定めました先づ頭領は忠治副頭領大久保一角丑寅の方組頭雲丑松西の方組頭が稲荷の九郎助」(P 183)というように、山寨の普請係という大役を任せられ、完成の暁には西の方組頭に就任している。普請係のことについては他書にも見られ、例えば④では「忠治は誰れ彼れと考へ見るに、九郎助こそ相応の者なれ、此の頃諸用繁多にして手放し難きものなれども、山寨の事故、余儀なしと早速九郎助を遣したり、夫より九郎助は普請係となり」(P 103)とある。

一方で⑨の講談本における九郎助は上記のような例よりも情けない人物である。「先づ盃を丑松に差し夫れから順にまわりました」(P 32)

とあり、一の子分の扱いは丑松である。忠治の両親の法事のあと、施行のことを言う場面では、忠治は九郎助に対してでなく皆に對して話し、丑松が答える(P 72)。さらに、三蔵を探しに忠治のもとへ乗り込んだ音右衛門の子分(竹五郎、槌松)に九郎助は投げ飛ばされる(P 131)。そのことを悔しがつて桶突く場面では、

稲荷の九郎助は兩人の者に投り出された程ですから口惜くて仕様がねい九郎「ザマア見やがれ居る者を居ねいなんて隠し事をするよーな親分じやねいサア雑言吐しやア此方も容赦が出来ねいだ……」忠治は九郎助を尻目に懸けて 忠「ヤイ／＼又其様事を吐しやアがる黙つて引込んで居ろ幾ら九郎助でも親分には一言も出ない」(P 132 133)

と忠治にたしなめられている。岩凹の山寨に関しても、この講談本ではだがが普請奉行といった記述はない。ただ、山寨に残った者として「九郎助を始めとして丑松、小八〔下略〕」(P 194)と、ここでは筆頭になっている。

以上〈実記系〉の忠次ものの文芸における九郎助は、かなり高い地位の子分であり、忠次からの信頼も篤いが、本によっては情けない面も見せる。「入れ札」において、「第一の兄分」を自認しながら喧嘩場から担ぎ出されるなどして若い者にその地位をおびやかされており、ついに情けない行為に出る九郎助の造型は、これら〈実記系〉におけるイメージと重なる。

次に「入れ札」において九郎助のライバルである浅太郎である。小説「入れ札」では「大間々の浅太郎」とされ、戯曲版では〈円蔵系〉で一般的な「板割の浅太郎」という名前に変えられている。小説の時

点では菊池は浅太郎の出身地または住まいを大間々だと思っていたようであり、以下、別表の忠次ものにより、子分内での浅太郎の位置づけと、浅太郎の出身地について確認する。

まず42には「植木の浅治」「板割の浅治」として登場する。「国定七本槍の一人に数へらるゝ兄貴分」(P 240)、「忠治の身内で兄貴と立てらるゝ浅治(一名板割の浅治)」(P 247)、「下植木村に、女房のお冬と不自由もなく暮して居た」(同)とある。この小説には「大間々の街」という地名も出てくるが、浅治や小説の筋とは無関係である。

44では、忠次は堂々村の紋治親分の跡目を継ぐという設定で、紋治の子分をそのまま譲られている。紋治の一の子分が浅太郎であった。

「第一番に板割の浅太郎、是は上植原(のち上植木と表記)と云ふところに生まれて、力があつて拳固で松板を打割つたので、人呼んで板割の浅太郎といふ」(P 35, 36)と紹介されている。「総領乾分の板割の浅太郎」(P 37)、「上植木の浅太郎人呼んで板割の浅太郎」(P 81)などであり、上植木(上植原)生まれの総領子分である。本書を借りた55も同じである。

その他の本でも、別表の子分名欄にあるとおり、「浅太郎」「浅次」「(武井)浅二」などの名前に「(上)」「(下)」植木「板割」などがつくのがほとんどで、浅太郎の出身地を大間々、とするものはない。

では、菊池は小説「入れ札」において、なぜ浅太郎を「大間々の浅太郎」としたのだろうか。これには、忠次が髪結床で捕り方に囲まれるというエピソードが関係していると思われる。この挿話では、忠次はなんとか逃げおおせたものの、囲まれたのは浅太郎が叔父の勘助に忠次を売ったせいだと誤解する。浅太郎は潔白を証明するため、勘助

の首を取って忠次に差し出すことになる。昭和になって「赤城の子守唄」で一層有名になる話の発端だが、この髪結床事件が起きた町について検証すると、16(41もほぼ同文)では忠次は清水の巖鉄と浅太郎を連れ、太田の町の妾おとくのもとへ行く。巖鉄と浅太郎を先に帰し、一人で太田に残り髪結床に入り捕り方に囲まれる(P 143, 145)。太田の町はおとくがいるというだけであり、浅太郎とは無関係である。

44では大間々に忠次の妾お栄がいる。浅太郎を連れて大間々に行った忠次は浅太郎に先にお栄のもとへ行かせて髪結床(碇床)へ行き、捕り手に囲まれる(P 147)。P 479では、妾の一人、大間々のお照(お栄がお照に変わる)は他に男が居たとして忠次の子分らに殺される。55も44と全く同じだが、同じく44を借りた56では忠次の妻お万と義父で捕り方の川田屋惣次が大間々に住んでいるという設定である。

57も44と設定は全く同じだが、57では大間々でなく大間口である(P 139)。上州に実在の地名は「大間々」であるから、誤記に気づかず「大間口」で通してしまったものであろう。

60では忠次は浅太郎を連れて太田駅へ行く。浅太郎は太田駅の生まれという設定で、顔が割れると困るので忠次は浅太郎を赤城山へ帰し、一人で太田の髪結い床へ行き囲まれる。この本のみ、忠次が床屋で囲まれた町が浅太郎の出身地という設定である。

以上のことから推測して、菊池は44のような例と60のような例の混同から、浅太郎が大間々出身であると勘違いをしたのではないか。あるいは寄席における実際の講談で大間々の浅太郎とするものがあったのかもしれないが、戯曲版では「板割の浅太郎」という最も例の多い呼称に訂正していることから、小説版「入れ札」では勘違いがあっ

たのではないだろうか。

また、先に確認したように、〈円蔵系〉において浅太郎は忠次の総領子分で、子分の中の兄貴分である。〈実記系〉で上位の子分である九郎助のライバルとして、〈円蔵系〉の「総領乾分」浅太郎を配したのは絶妙であり、効果を計算したものであろう。また、他の忠次の文芸とは異なり、敢えて両系統の子分名を混合させた理由もそのためであると考えられる。

次にいささか細かいことではあるが、「入れ札」における忠次の造型について見てみたい。忠次の容貌について、「入れ札」では「小髻の所に、傷痕のある浅黒い顔」「大きい眼」と描いている。これに類するものに29「忠次は丈の小さい色の浅黒い目のギョロツした余り親分らしひ男では御座いません」(P51)、43「色の浅黒い目のギョロリとした忌に苦み走つた小作りの男」(P21)という例がある。浅黒いというのは44にも「中川勇蔵のもとで剣術修行をしたので」色も浅黒く肥満して、何う見ても無職渡世の親分と言はれて恥しくない」(P38)とある。

しかし忠次を浅黒いとするのは少数派であり、他は4「忠二色白くして身体肥へ言語動作ともに穩にて」(26編P23)、6「忠二肥面白。言貌沈毅。」(48丁オ)、11「容貌清秀肥えて而して色白く一個の好男子なり」(P78)、21「一見溢るゝ如き愛嬌あつて馴るゝに易く、而も色白くして肉豊に小肥の肌膚美しく、平日は蠟ろうすら殺さざる温順に驚かざるはなし」(P135)、31「色白で言葉も動作まひも至つて穩やかで」(P94)、32「色白く、長大肥満にして而も軽捷」(P414)、42「色の白い眼のぱつちりした円顔」(P7)、45「色白な粟とした任侠いなきな男

振」(P193)、51「色白の太り肉で、眼が涼しいそしてゆつたり落着いてゐる処は、何うしても人の長をきとなるだけの特質を生れ乍らにして有つてゐるらしかつた」(P208)等、色白であるというほうが多い。菊池は29、43のような例に拠つたか、あるいは旅を続けている設定のために浅黒いとしたものであろう。

そして次に「入れ札」において最も重要な設定である、忠次と子分との別れの場面について検討する。大戸の関を破つた後、そこから二里ばかりの山中にて忠次は大半の子分と別れることにする。

平生の忠次だつたら、「おい！浅に、喜蔵に、嘉助とが、俺と一緒に来るんだ！外の野郎達は、銘々思ひ通りに落ちて呉れ、路用の金は、分けてやるからな！」／と、何の拘泥もなく云へる筈だつた。

として、ここで忠次にためらいが生じ、子分らの提案で入れ札となるわけである。他の忠次ものと比較すると、別表の「子分と別れ一人に」という欄に記したとおり、忠次が赤城山や信州、近江などで子分らに金を分け与えて別れ、一人になるという場面は主に〈円蔵系〉の諸書にある。しかし、忠次自身が大勢の子分の中から、連れて行く少数の子分(三人)を選ぶという設定があるのは44と、44を下敷きにした55、57である。

44では大戸の関を破つたあと、乾分との別れに際し、いったん三人を選び伴にする。

忠次は予て用意をして参つた金を各自に分配てやりまして、三兎に角己は板割の浅太郎、成塚の三代太郎、清水の岩鉄、是れだけを連れて信濃路へ入る、貴様達には縁と生命があつたなら又会は

ふから、宜いか其意^{おも}りで何うか皆なも身體を丈夫に、『下略』
(P 183)

と、躊躇なく三人を指名する。忠次はやがてその三人とも別れ、一人で善光寺へ向かう(P 189)。

子分を三人だけ連れて行くという設定は例えば43にもあるが、「上州岩鼻に於て代官所を襲つて悪代官松田軍兵衛を殺した一件から世の中を狭めるやうな事になり、清水の巖鉄、三木の文蔵、板割の浅太郎と云ふ三人の子分と共に、国を立退き中仙道碓氷の裏番所、大戸の御関所を廻るなく破つて信州路へ入り」(P 2) というように、43では忠次自身が三人を指名する場面はなく、また四人で大戸の関を破ったことになっている。また42では代官殺しなどの後、「乾分のももの大部分と袖を分つて、僅か六人の同勢で越後路へ落ちて行つた。」(P 287) とあるが、六人を選ぶ場面はない。

本稿冒頭で触れたように、菊池は「入れ札」の翌年発表の「岩見重太郎」で博文館長篇講談を下敷きにしており、「入れ札」執筆に際しても44の博文館長篇講談を参照した可能性があり、もしそうだとすれば目の付けどころ、素材の活かしかたは見事だと言える。なお博文館長篇講談については次節で補いたい。

最後に一点、菊池の「入れ札」を他の忠次ものの文芸と比べた時、不審な点がある。それは大前田英五郎への言及である。「入れ札」では「去年、大前田の一家と一寸した出入のあつた時、彼(九郎助)は喧嘩場から、不覚にも大前田の身内の者に、引つ担がれた。」とある。大前田英五郎(栄五郎)は〈円藏系〉の登場人物であるが、17では伊三郎と忠次の対立を仲裁し、12、14では同じく伊三郎との対立で忠治

に味方する。42では勘助殺しの件で忠治が追われているのを解決するなどし、16「忠次ハ死ぬまで大前田兄弟(田島要吉・英五郎)の恩を忘れずに終つた人であります」(P 58)と言われるほどの忠次の恩人である。従つて「入れ札」で「大前田の一家と一寸した出入」があるというのはおかしい。これも先の「大間々」同様、何らかの勘違いであろう。あるいは名前のみ借りたために生じた矛盾かもしれない。

以上本節で検証してきたことから、「入れ札」執筆に際し、菊池が丁寧な考証をしたとは思えないものの、諸書にあたり、素材を適材適所で生かしていった創作の様子がうかがえる。

五、博文館長篇講談の影響

本節からは、「入れ札」と直接関わることはないが、忠次ものの文芸をめぐる明治大正期の状況について補足を加えておきたい。稿者はこれまで講談本の大正期文学への影響を調査研究する中で、特に博文館長篇講談という叢書に注目してきた。本節では、忠次ものにおける博文館長篇講談(44)の影響について確認する。

別表のうち44の博文館長篇講談を下敷きになっているのは浪花節の55(フシが入るほかは44からの抜書き)、講談本の57(細部に違いはあるがほぼ同筋)、脚本の56、また一部参照したらしいのは社会講談の50である。特に56は撰取のあとがからさまで、大正期の作家たちが博文館長篇講談を参考書にしていた様子がわかる一例である。具体的に比較してみると、例えば56川村花菱「国定忠次 三部曲」から、前節でも触れた、忠次が髪結床で捕り方に囲まれた一件で、浅太郎が忠次に疑われる場面を引用する。

忠次

浅、己れが無事で山へ戻つて、手前は何か目出度いんだ、己れが亀の子のやうにしばられて引かれて行つたと聞いたらばお前は踊つて喜ぶだらうが、まだ運が尽きねーのか、そうは問屋で下ろさねーんだ！皆聞け！己らあ浅に売られたんだ！己あ飼犬に手をかまれたんだ！

浅太郎

親分妙な事を仰有いますね、どういふ話の行違ひかは知らねーが、皆よく聞いてくれ！己らあ親分のお供をして大間々の町へ出ると、親分は己れは月代を当つて行くから、浅手前は一步先きへお采の所へ行つて居ろ、何でも行けと云はれるので、己らあ姐御の所へ行つて、もう御出になる頃だと、首を長くして待つて居ると、いやに外が騒々しい、出て見ると親分が碇床で取り巻かれたと云ふはなしで大変だと飛び出して見ると、とても傍へは寄れねーので、あつちをさがし、こつちをさがし、やう／＼の事でたつた今山へ戻つて様子を聞いて安心したばかりなんだ！

〔下略〕（P 266 - 267）

この場面は44博文館長篇講談の次の部分を借用していることが明らかである。

忠『なに、何が目出てえんだ、己れが此山へ無事で帰つて居ちやア、爾お目出てえんぢやあるめえ、己れが亀の子のやうに縄に掛つて送致にならなけりやア、爾の方でお目出てえ訳はねえ』浅『へえー親分、妙なことを仰しやいますね、私は姐御のところ、今に親分がお人になるからと言つて種々支度をして居ると、何だか表が騒々しい、何だらうと様子を聞かせると、只今親分が碇床で取巻かれたつてえから、其奴ア大変だと往つて見ると、親分

は大家根へ上つて、何分にも雲霞のやうに取巻いて、逆も手が付けられねえ、其内に親分は逃げておくんなすつたから、彼方を探し此方を探し漸う今此山へ歸つて来たのに、〔下略〕（P 153 - 154）この一例の他にも同様の借用が多々ある。ただ、忠次が悪行の報いか蹟いて足の生爪をはがすというモチーフなど、44にはなく他書（16、47）にあるモチーフもあり、花菱の「国定忠次 三部曲」は複数の先行作品を参照したものと思われるが、博文館長篇講談を主な参考書として書かれたとみてよい。ちなみに爪をはがす挿話は16、47では忠次の運の尽きる予兆として描かれており、47は澤田正二郎の新国劇の脚本であるから、舞台で見慣れたものだったのだろう。

なお、花菱「国定忠次」の大正期の上演には、一二年二月観音劇場、同一二月品川劇場、一三年一月牛込会館、一四年二月早稲田劇場、同四月大國座、同一月常盤座などがある（小宮麒一編『歌舞伎・新派・新国劇配役総覧』（平一・一）『歌舞伎・新派・新国劇上演年表』（平一九・二）（ともに第六版、私家版）、および田中栄三『明治大正新劇史資料』（昭三九・二一）演劇出版社、松竹大谷図書館蔵川村花菱関連資料より）。三部曲のうち一部だけを上演することもあったようだ。松竹大谷図書館には花菱の自筆原稿などの資料が残されている。「国定忠次 三部曲」の第一「赤城の月」の原稿末尾には「大正十二年一月十日作」、第二「雪の信濃路」原稿には「大正十二年一月二十九日」と記されており、脱稿はこの頃であったらしい。博文館長篇講談が新劇にも取り入れられていたのである。

六、大正期後半の展開 社会講談

最後に、忠次ものの文芸の大正末期における独特の展開について触れておきたい。別表 50、59 の社会講談である。社会講談については本稿冒頭で言及した拙著で、荒畑寒村の社会講談との関係で論じたことがあるが、大正後期、社会主義のプロパガンダのため、講談調の素材、ストーリーと語り口で、庶民にわかりやすく思想を説いたものである。

忠次ものに関しては、天保の大飢饉に際し、忠次が金を調達して貧民に施しをしたという話が、資本家に搾取される労働者の問題と重ねやすいため、社会講談にも利用しやすい素材であった。金の調達方法については、私財をなげうつ、大賭場を開いた収益で、飛脚を襲ってなど、諸書により様々であるが、多くの忠次ものの文芸がこのことに触れており、別表「貧民への施し」欄のとおりである。

社会講談以前にも、44 の博文館長篇講談ではこの施しについて「忠次は大正の今日で申して見れば、先づ社会党とでも言ふやうな行りかたで、金のある所から金を借り込んで、而して現時餓死せんといふ者を助けやうといふんだから」(P 99) とある。大正期後半に社会講談の試みが始まると、忠次ものでは二作の社会講談が作られた。50 は 42 と 44 を参照した形跡が見られ、59 は 44 か 57 を一部参照したかと思われ、講談本など先行する忠次ものを利用している。いずれも忠次らが金飛脚を襲い、太田の大光院(59 は西光院)の宝蔵を破って大金を奪い、貧民に施した話と、役人・金持ち批判を中心としている。社会講談という試みは成功したとはいえないが、プロレタリア文学、大衆文学へとつながるものであり、時代の様相を表している。忠次ものの一挿話

がこのような形で利用されたことも、忠次ものの文芸の一面面として興味深い。

七、おわりに

以上、明治大正期の国定忠次ものの文芸の中で菊池寛「入れ札」の創作方法を検証し、あわせて博文館長篇講談や忠次ものの文芸の諸様相についても言及した。今回の調査は文芸に限り、映画は対象外としたが、大正から昭和まで忠次ものの映画は多数作られ、それらが一般に与えたイメージも看過できない。

大正期を通じて尾上松之助主演の忠次ものは繰返し制作され、阪東妻三郎主演でも「忠次信州落」(大一一三)、「国定忠治落ち行く奥州路」(大一一五)等が公開された。昭和二年には大河内伝次郎主演、伊藤大輔監督による「忠次旅日記」三部作も公開されている(以上「日本映画情報システム」(文化庁))。例えば大正六年七月公開の谷口元三郎主演「国定忠次」については「活動画報」大正六年九月号(『日本映画初期資料集成』第八巻 平三 三二書房)に写真掲載があり、キャプションを見ると円蔵、三代太など(円蔵系)の人物名が並ぶ。本作について同誌の「市内各館めぐり」欄では「三友館の国定忠次は傷害保険三万金を附して、撮影したと言ふ大物である。而して三友館開館以来の長尺で、稍理想に近い写真である」と、ある人は自負してゐた。」と紹介されている。

また先掲「国定忠治落ち行く奥州路」には川口松太郎「映画物語国定忠治落ち行く奥州路」(『映画時代』大一一・九)によるあらすじの説明と評があり、(円蔵系)だとわかる。円蔵などの名がタイトルに入っ

た映画もあり、映画の忠次ものには〈田蔵系〉が多いようである。なお映画の忠次ものについては、藤井康生「映像の中の芸能(12)国定忠治―千恵蔵・大河内・近衛・三船・辰巳・阪妻」(『上方芸能』平一七・九)に概要があるが、講談本の影響については書かれていない。映画も当然のことながら講談本等を下敷きに行っていることであろうが、今回その調査にまでは至らなかった。

国定忠次ものは、映画や新国劇の舞台で人気を得ただけでなく、昭和になると真山青果、子母澤寛、長谷川伸らの作家により、大衆文学として、またその舞台上演により息の長い人気を誇っていく(尾崎秀樹に「国定忠治と三人の作家」(『テアトロ』昭五三・九)がある)。そのルーツとしての講談本、実記本の状況は明らかにしておくべきであろうし、また菊池寛の自信作「入れ札」の創作方法を検証するのにも、明治大正期忠次の文芸を知ることが不可欠である。

※本稿は大阪市立大学国語国文学会総会(平成二十四年七月二十一日)における発表内容をもとにしています。ご意見を賜りました先生方に御礼申し上げます。

※本稿は平成二十四年度科学研究費補助金(若手研究(B) 課題番号21720083「博文館長篇講談の研究―芥川龍之介を中心とする大正期文学の材源として―」)による研究成果の一部です。

番号	作 品 名	作 者 名	種 別	発表／刊行年月	発表誌／発行所	九郎助	主 な 子 分 名	忠次の生立ち	貧民への施し	子分と別れ一人に
①	国定忠次侠勇伝 (上の巻、下の巻)	柳水亭種清省録	合巻	1880.01か (1879～1882)	丸屋 小林鉄次郎板	○	大仏小八、闇雲丑松、平氣の常蔵、太鼓の仁八、青の三蔵、野面の権九郎、大久保一角、並河の孝子才助、鉄砲音吉、小猿伝吉、闇魔の玄哲	父は忠助。幼少より悪行で叔父彦助に預けられる	家財を売り	岩凹にて最後の盃、近しい子分は残る。
②	嘉永水滸伝 一名 国定忠治之伝 巻之壹～巻之三		合巻	1880.02	編輯兼出版人 大西庄之助	○	釈迦の十蔵、大仏小八、闇雲丑松（牛蔵とも）、平氣の常蔵、太鼓の仁八、青の三蔵、野面の権九郎、小猿の伝吉、大久保一角、並川才助、畚まの玄哲坊	父は忠助。幼少より悪行で叔父彦助に預けられる	家財を売り	岩久保にて最後の盃、近しい子分は残る。
③	国定忠次義名の高嶋 (初編～三編)	川上鼠邊	合巻	1880.02～03	金松堂辻岡文助	○	大仏小八、釈迦の十蔵、闇雲の丑松、青の三蔵、太鼓の仁八、平氣の常蔵、小猿の伝吉、闇魔の玄哲坊	×	×	×
4	国定忠二の実説	『実事譚』第二十四編～第二十七編のうち	実記	1882.03	兎屋誠	×	日光円蔵、八寸厚乙、山王民五郎、三木文蔵、武井浅二（伯父の博徒勘助の首をとる）、秀吉、桐長、鹿安、阿婆辰、書生直助	父は百姓五右衛門、十七歳で殺人、河越頼五郎の子分に。	賭場の運上や蓄えの金	江州で子分らと別れ会津へ。
⑤	上州織侠客大縞	三代目河竹新七作の歌舞伎	筋書	1884.07.11～25	「歌舞伎新報」 437～442号	×	岩窪の玄哲、小猿の伝吉、おぼこの三代吉、くら闇の丑松（一の子分）	×	○	×
6	俠盗忠二	依田百川『譚海』 巻二のうち	随筆	1884.08	鳳文館本舗	×	日光円蔵、八寸才市、山王民五郎、武井浅二（伯父の博徒勘助の首を取り子を殺す）、三木文蔵、神崎友五郎（身替りて捕縛）	父は五右衛門。十七歳で殺人、河越の栄五郎の下へ。	私財。磯沼浚いは大賭場を開いて。	赤城山で子分に金を分配。一人陸奥へ。
⑦	嘉永水滸伝国定忠治 実記全		実記	1885.11	金泉堂	○	闇雲の丑松、平氣の常蔵、大仏の小八、釈迦の十蔵、青の三蔵、太鼓の仁八、野面の権九郎、小猿の伝吉、大久保一角、並川の才助、玄哲坊	父は忠助。幼少より悪行で伯父彦助に預けられる	家財を売り	岩窪にて最後の盃、近しい子分は残る。
⑧	絵入国定忠治実記		実記	1886.09	金泉堂	○	⑦とほぼ同文。同紙型か。	父は忠助。幼少より悪行で伯父彦助に預けられる	家財を売り	岩窪にて最後の盃、近しい子分は残る。
⑨	絵入国定忠治実記		実記	1888.01	精文堂	○	⑧と表紙デザインが同じ。紙型は違うがほぼ同文で⑧の上巻途中までを収録。	父は忠助。幼少より悪行で伯父彦助に預けられる	家財を売り	×
10	悪事ノ内仁忠治ノ花 誌ノ天弘国定記	林源次郎	実記	1890.02	野村銀次郎	×	日光円蔵、三ツ木の文蔵、下植木の浅二郎（伯父中嶋勘助とその長子の首を取る）、国定の清五郎、五目牛村の千代松	父は名主長岡権太夫、母タカ	飛脚の金	×
11	国定忠次	『古今ノ名誉実録』 第十巻のうち	実録	1894.03	春陽堂	○	五目牛の千代松、甲州無宿の新十郎、下植木の浅二（伯父の博徒勘助の首をとる）、三ツ木文蔵、日光円蔵、山王民五郎、八寸厚乙、神崎友五郎（身替りに捕縛）	父は百姓権太夫。十七歳で殺人、河越栄五郎の下へ。百々村の紋二を継ぐ	家財。磯沼浚いは大賭場を開いて	近江で子分に金を分配、一人で会津へ。
12	侠客 国定忠次 (講談百種 第二十冊)	揚名舎桃李講演、 今村次郎速記	講談本	1894.06	九阜館	×	日光円蔵、成塚の三代太郎、足利の権三郎、三ツ木の文蔵、三室村の勘次（伯父磯右衛門の首をとる）、清水の巖鉄、松井田の喜蔵	父忠五郎を十歳で失う。 天王藤三郎の跡目を継ぐ	家財を売る、飛脚	信州にて
⑬	国定忠次実記	帝国文庫第四十八編『侠客伝全集』 のうち	実記	1897.03	博文館	○	闇雲の牛松、平氣の常蔵、大仏小八、横なでの仁蔵、釈迦の十蔵、青の三蔵、太鼓の助八、野面の権九郎、小猿の伝吉、大久保一角、並川の才助、玄鉄坊	父は忠助。幼少より悪行で叔父彦助に預けられる	家財を売り	×
14	嘉永水滸伝国定忠治	薬々齋桃葉（神尾鉄五郎）講演、浪上義三郎速記	講談本	1897.06	朗月堂	×	日光円蔵、成塚の三代太郎、足利の権三、三ツ木の文蔵、磯の村の照吉、鹿沢の才助、室沢の重吉（伯父磯太郎の首を取る）	天王藤三郎の跡目を継ぐ	米を買い占めた商人を脅して	×
⑮	嘉永水滸伝国定忠次	邑井一講演、速記 社々員速記	講談本	1899.03	萩原新陽館	○	暗雲の丑松、平氣の常蔵、大仏の小八、釈迦の十蔵、青の三蔵、太鼓の仁八、野面の権九郎、小猿の伝吉、大久保一角、並河の孝子才助、玄哲坊	父は忠助。幼少より悪行で叔父彦助に預けられる	家財を売り	岩窪にて最後の盃、近しい子分らは残る。
16	侠客 国定忠次	宝井馬琴講演、今村次郎速記	講談本	1899.03	金槓堂	×	日光円蔵、三木文蔵、神中の清造、板割の浅太郎（伯父御室の勘助の首を取る）、清水の巖鉄、高山の定八、松井田の喜蔵、高崎の重吉、山王堂の民五郎、穂積の卯之助、成塚の三代太、足利の権太	馬方	飛脚、富家に頼む、脅す	信州にて
17	国定忠次	一立齋文雅講演、 酒井楽三速記	講談本	1900.10.	文事堂	×	成塚村の三代太郎、足利の権三郎、山王堂の浅太郎、日光の円蔵、三ツ木の文蔵、鹿沢村の才助、三室の勘次（伯父磯右衛門の首をとる）	天王藤三郎の跡目を継ぐ	×	赤城山で子分に金を分配。桐生の彦兵衛と武州へ。
⑯	国定忠治	桃龍齋梅玉自講自記	講談本	1900.04	順成堂	○	大仏の小八、暗雲の丑松、平氣の常蔵、太鼓の仁八、青の三蔵	父は忠助。幼少より悪行で伯父彦助に預けられる	家財を売り	×

番号	作 品 名	作 者 名	種 別	発表／刊行年月	発表誌／発行所	九郎助	主 な 子 分 名	忠次の生立ち	貧民への施し	子分と別れ一人に
⑪	侠客／国定忠治	神田伯林講演、速記会員速記	講談本	1902.04	湯浅春江堂	○	暗雲の丑松、平気の常蔵、太鼓の仁八、青の三蔵、大仏の小八、野面の権九郎、釈迦の十蔵、小猿の伝吉、大久保一角	父は忠助。幼少より悪行で伯父彦助に預けられる	家財を売り	岩窪にて最後の盃、近しい子分は残る。
⑫	嘉永水滸伝	『通俗小説文庫 参月之巻』のうち	実記	1906.03	近事画報社	○	⑦とほぼ同文。多少の異同あり。	父は忠助。幼少より悪行で伯父彦助に預けられる	家財を売り	岩窪にて最後の盃、近しい子分は残る。
21	国定忠次	樋口二葉『日本侠客実伝』のうち	史談	1908.12	晴光館書店	×	日光円蔵、八寸才市、山王民五郎、武井浅二（伯父の博徒勘助の首をとる）、三木文蔵、神崎友吉（身替りで捕縛）	父は吾兵衛、二十五歳で殺人、河越の栄五郎の下へ。	磯沼浚いに私財をなげうつ	×
22	国定忠治侠客くどき	湯浅糸策編『くどき五百段』のうち	口説き節	1910.11	春江堂書店	×	日光無宿両刀遣ひの円蔵、甲州無宿甲斐の近、朝おき源五、坂東安二	裕福な百姓忠兵衛の二番息子。親に見限られ博徒に。	×	×
23	国定忠次の度胸	伊藤痴遊	講談本 (書き言葉)	1911.01	「冒険世界」 4巻2号	×	山王民五郎、平助、	×	×	×
24	侠客／国定忠治	浪花亭辰燕口演『浪花節有名会』のうち	浪花節	1911.10.	国華堂	×	忠次の身なりの描写と、越後長岡に米八親分をたすね、偽の忠次が悪さをしていると聞く、というくだりのみ	×	×	×
25	侠客国定忠次（忠次召捕）	『浪花節大博士』のうち。緑葉女史編輯	浪花節	1912.02	和田文宝堂	×	照吉、円蔵、丑三、松蔵、佐吉	×	×	かくまわれた名主の家で別れの盃
26	侠客／国定忠治	『浪花節十八番』のうち、浪花亭峯吉	浪花節	1912.04	日吉堂	×	大久保一角、闇雲の丑松、釈迦の十蔵、鉄砲の音吉、青の三蔵、大仏小八／日光の円蔵、三代太、権三、照吉	×	×	×
27	侠客国定忠次	『浪花節大集会』のうち。三河家清治講演	浪花節	1912.04	和田文宝堂	×	日光円蔵、清水のがん鉄	×	御用金	×
28	浪花節／国定忠治	浪花亭辰丸口演『侠客伊達の面影』のうち	浪花節	1912.04	湯浅春江堂	×	三ツ木文蔵、日光円蔵、清水の頑鉄、板割の浅太郎	馬方（天王藤三郎に引き立てられた、とある）	×	×
29	国定忠次	『浪花節大和魂／侠客伝』のうち。悟楽齋三叟口演	浪花節	1912.06	由盛閣	×	成塚の美代太、板割の浅太郎	×	×	×
30	国定忠治侠客くどき	坪井糸蔵編『くどき千段』のうち	口説き節	1912.06	和田文宝堂	×	22とほぼ同文	裕福な百姓忠兵衛の二番息子。親に見限られ博徒に。	×	×
31	国定忠次	京山大教口演『日本侠客銘々伝』のうち	浪花節	1912.07	日吉堂書店	×	日光円蔵、三ツ木の文蔵、山王民五郎、五日牛村の千代松、下植木の浅二郎（板割の浅次郎）	×	大花会の収益で磯沼浚い	×
32	『親分子分／侠客篇』59～62節	白柳秀湖	史談	1912.08	東亜堂書房	×	日光円蔵、八寸才一、山王民五郎、武井浅二（おじの博徒勘助の首を取り子を殺す）、三木文蔵、神崎友五郎（身替りで捕縛）	父は百姓の吾兵衛。二十七歳で殺人、河越の栄五郎の下へ。	私財。磯沼浚いは大賭場を開いて。	赤城山で子分に全財産を分配。一人陸奥へ。
33	国定忠次	浪花節倶楽部口演『浪花節／侠客銘々伝』のうち	浪花節	1913.04	日吉堂書店	×	31とほぼ同文	×	大花会の収益で磯沼浚い	×
34	侠客国定忠次	無禅庵主人著、浪界革新会編『浪花節独演習』のうち	浪花節	1913.07	国華堂	×	フシが3行ほどあるのみ	×	×	×
35	〈芝居見たまゝ〉国定忠次	山崎紫紅作「国定忠次」梗概（竹田奴筆）	劇評／筋書	1913.08	「演芸画報」 7年8号	×	松井田の喜蔵、足利の権蔵、高山の定八、鳴塚の三代太	×	×	×
36	国定忠次赤城の喧嘩	浪花亭愛造	浪花節	1913.10.	「講談倶楽部」 3巻12号	×	羽黒の玄鉄（「読む人に依ると、清水の岩鉄」）	×	×	×

番号	作 品 名	作 者 名	種 別	発表／刊行年月	発表誌／発行所	九郎助	主 な 子 分 名	忠次の生立ち	貧民への施し	子分と別れ一人に
37	上州侠客国定忠次	講談名人会編『講談十八番』のうち	講談本	1914.01	堀田航盛館	×	×	馬方、父は為朝忠五郎。継母の間夫に父を殺され、高瀬の宗兵衛の養子に。	×	×
38	国定忠治	『東家楽遊／一節集』のうち。浪花亭愛造	浪花節	1914.05	大川屋書店	×	羽黒の修験者玄鉄、板割の浅太郎、無鉄砲の音吉、日光無宿の猿（ママ）蔵	×	×	×
39	国定忠治	『桃中軒雲右エ門一節集』のうち	浪花節	1914.05	大川屋書店	×	38と同文	×	×	×
40	国定忠治	『吉田奈良丸一節集』のうち	浪花節	1914.05	大川屋書店	×	38と同文	×	×	×
41	侠客国定忠次	宝井馬琴講演、今村次郎速記	講談本	1916.03	大川屋八千代文庫第七編	×	16と別本だがほぼ同文	馬方	飛脚、富家に頼む、脅す	信州にて
42	侠客忠治	平井晩村	随筆／小説	1916.08	大日本雄弁会	×	肝煎り清五郎、三つ木文蔵、植木（板割）の浅治（伯父勘助の首を取る）、五目牛の千代松、相州無宿の新十郎、日光円蔵、大久保一角	父は名主。博徒になると決意し曲り沢の富吉を継ぐ	飛脚、悪代官屋敷	六人のみ連れて赤城山を下り越後路へ
43	国定の忠次	神田伯山	講談筆記	1917.06	「講談雑誌」3巻7号	×	清水の巖鉄（頑鉄）、三木の文蔵、板割の浅太郎	×	×	信州で三人の子分と別れ一人に
44	国定忠次	西尾鱗慶講演、博文館長篇講談第19編	講談本	1917.05	博文館	×	板割の浅太郎（伯父御室の勘助の首を取る）、松井田の喜蔵、高崎の重吉、穂積の卯之助、山王堂の谷五郎、福島の高蔵、清水の岩鉄、三ツ木の文蔵、日光の円蔵、成塚の三代太郎	馬方	富家、飛脚と太田の光大院	三人を連れて信濃路へ。一人になり善光寺へ。
45	忠治の妾	萩原星城	小説	1917.10.	「講談倶楽部」7巻14号	×	板割の浅太郎、五目牛の千代松、円蔵	×	飛脚	×
46	国定忠治	『近世実録全書 第五巻』のうち	実記（実録）	1917.12	早稲田大学出版部	○	釈迦の十蔵、大仏小八、闇雲の牛松、平気の常蔵、太鼓の仁八、青の三蔵、野面の権九郎、小猿の伝吉、大久保一角、並川の才助、玄哲坊	父は忠助。幼少より悪行で伯父彦助に預けられる	家財を売り	岩凹にて最後の盃、近しい子分は残る。
47	（極付）国定忠治	行友李風	脚本	1919.08 大阪 弁天座初演（新国劇）	『行友李風戯曲集』（1987.11 演劇出版社）より	×	板割の浅太郎（捕り方御室勘助の娘婿。勘助を闇討ちにしようとし、切腹した勘助の首を忠治に差し出す）、日光円蔵、三津木の文蔵、足利の権三、高山の定八、清水の巖鉄	×	×	信州で円蔵、浅太郎とも別れ一人に。定八、巖鉄と再会。
48	国定忠次	醍醐恵端『侠客の戸籍調べ』のうち	史談	1920.01	二松堂書店	×	生魚の巖鉄	×	博打の金	×
49	入れ札	菊池寛	小説	1921.02	中央公論	○	大間々の浅太郎、釈迦の十蔵、嘉助、松井田の喜蔵、闇雲の忍松、吉井の伝助、才助、弥助	×	×	三人のみ連れる。
50	社会講談／国定忠治	宮島資夫	社会講談	1921.03	「改造」3巻3号	×	日光円蔵、成塚の三代太郎、三津木の文蔵	×	飛脚、太田の光大院	赤城で子分と別れ信州路へ
51	大胆不敵の長脇差／国定忠次の最後	淡路呼潮	小説	1922.02	「講談倶楽部」12巻3号	×	三木文蔵、八寸犀市、日光円蔵、山王民五郎、武井浅次、書生直助、境川安五郎	×	×	江州で子分と別れ会津を指す
52	国定忠次綱取明神の喧嘩	西尾鱗慶	講談筆記	1922.07.10	「サンデー毎日（特別号）」	×	板割の浅太郎、松井田の喜蔵、高崎の重吉、穂積の卯之助、山王堂の谷五郎、福島の高蔵、清水の岩鉄、三ツ木の文蔵、日光の円造（ママ）、成塚村の三代太郎	44と同演者。44の第五席末尾～第六席半ばまでに多少手を入れて一席ものに仕立てたもの。伊三郎との喧嘩場面のみ。		
53	国定忠次牡丹酒	児玉花外	長詩	1923.05	「講談倶楽部」13巻9号	×	日光の円蔵	馬方	×	×
54	実伝／国定忠次	筑波四郎	小説	1923.07～1928.04	「講談倶楽部」連載	○	日光円蔵、八寸才市、甲州無宿の新五郎、三ツ木の文蔵、五目牛の千代松、下植木の浅次（叔父勘助の首を取りその子を殺害）、山王の民五郎、九郎助	父は名主。人殺しをして英五郎の下へ。百々の紋二を継ぐ。	×	×

番号	作 品 名	作 者 名	種 別	発表／刊行年月	発表誌／発行所	九郎助	主 な 子 分 名	忠次の生立ち	貧民への施し	子分と別れ一人に
55	浪花節／侠客忠次	東家扇遊講演	浪花節	1924.03（復興印刷、4月6版）	三芳屋書店	×	板割の浅太郎（伯父御室の勘助の首を取る）、松井田の喜蔵、高崎の重吉、穂積の卯之助、山王堂の谷五郎、福島常蔵、清水の岩鉄、三ツ木の文蔵、日光の円蔵、成塚村の三代太郎、44の抜書き	馬方	富家、飛脚と太田の大光院	三人を連れて信濃路へ。一人になり善光寺へ。
56	国定忠次 三部曲	川村花菱『脚本集 国定忠次』のうち	脚本	1924.12	文興院	×	板割の浅太郎（伯父御室の勘助の首を取る）、日光の円蔵、山中の勘太郎、牛若小僧弁之助	×	×	加部安を出る際、信濃へ行く前に一人に。
57	侠客／国定忠治	玉田玉秀齋講演、岡本長編講談	講談本	1925.04（50版）	岡本増進堂	×	板割の浅太郎（叔父御室の勘助の首を取る）、松井田の喜蔵、高崎の重吉、穂積の卯之助、山王堂の谷五郎、福島常蔵、清水の岩鉄、三ツ木の文蔵、日光の円蔵、成塚村の三代太郎	馬方	富家、飛脚と太田の大光院の宝蔵の二千両	三人を連れて信州須坂へ。やがて一人に。
58	入れ札	菊池寛	脚本	1925.11	中央公論	○	板割の浅太郎、島村の嘉助、松井田の喜蔵、玉村の弥助、並河の才助、河童の吉蔵、闇雲の牛松、釈迦の十蔵	×	×	三人のみ連れる。
59	社会講談／国定忠次	岡陽之助	社会講談	1926.08	「解放」（解放社）5巻8号	×	日光円蔵、板割の浅太郎、清水の巖鉄、三津木の文蔵	×	飛脚、太田西光院	×
60	国定忠次	神田伯龍講演、丸山平次郎速記	講談本	不明	不明	×	日光円蔵、板割の浅太郎（叔父御室の勘助の首を取る）、朝比奈金太、大渡伊之助、猿渡の伝次、青葉三蔵	馬方	×	信州路にて
61	歌舞伎座盆興行	下町二人娘	劇評	1913.08	「歌舞伎」158号	大正2年7月歌舞伎座上演 山崎紫紅作「国定忠次」の劇評。同誌に（伊原）青々園の劇評「歌舞伎座」も。				
62	七月の歌舞伎座	久保田萬太郎	劇評	1913.08	「演芸倶楽部」2巻8号	大正2年7月歌舞伎座上演 山崎紫紅「国定忠次」評。序幕は「みんな嫌味のない出来」でよかったが、二幕目以降は統一を欠きよくなかった、との評価。				
63	山崎紫紅氏作『国定忠次』見物記	豊嶋屋いつみ	劇評／梗概	1913.08	「演芸倶楽部」2巻8号	大正2年7月歌舞伎座上演 山崎紫紅「国定忠次」評とあらすじ。				
64	無線電話	室田武里	劇評ほか	1916.07	「演芸画報」3年7号	室田が先代（五代目）菊五郎に電話で話を聞くという設定。明治17年の「上州織侠客大綱」初演時の話。馬士を切って千両箱を奪る場面、箱が軽すぎると見物に忠告されたこと。				
65	今度の国定忠次	尾上菊五郎（六代目）談	「名家芸談」	1916.08	「演芸画報」3年8号	大正5年7月市村座上演「上州織時好大綱」について。明治17年先代初演の「上州織侠客大綱」に修正を加えた点を具体的に述べている。				
66	牡丹燈籠と国定忠次について	森下金鳥	劇評	1916.08	「新演芸」1巻6号	大正5年7月市村座上演「国定忠次」（「上州織時好大綱」）の劇評。同誌に口絵写真が多数。菊五郎の忠次、東蔵の小猿の伝吉、等。実記系。				
67	新国劇の舞台印象	榎十二郎	劇評／梗概	1923.09	「演芸画報」10年9号	大正12年8月浅草十二階劇場での澤田正二郎の新国劇「国定忠次」（行友李風作）の見物記。梗概は李風の脚本（47）どおり。一点異なるのは、妙真を斬り殺すとあるが、47では踏み殺す。				
68	わしが国さ	伊藤金次郎	随筆	1926.07	刀江書院	地元に伝わる忠治について。具体的な伝説については言及なし。				